

マルコによる福音書 14 章 12 節～26 節

2018 年 8 月 23 日

古本 靖久

1、聖歌 240 番 「二階の広間で 弟子たちと共に」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 91 ページ）

4、テキストの位置

いよいよイエス様の逮捕が近づいて来ました。イエス様は木曜日に最後の晩餐の中で、最初の聖餐式をおこなったとされます。またヨハネによる福音書にはイエス様が弟子たちの足を洗う、いわゆる「洗足式」の記事も載せられています。

エルサレムにて	水曜日	14:1-2	イエス殺害計画
		14:3-9	埋葬準備
		14:10-11	ユダの思い
	木曜日	14:12-16	過越の準備
		14:17-21	主の晩餐
		14:22-26	最初の聖餐式
		14:27-31	ペトロの裏切り予告
		14:32-42	ゲツセマネでの祈り
		14:43-52	イエスの逮捕
		14:53-65	イエスの裁判
14:66-72	ペトロの否認		

実際にはユダヤでは日没と共に次の日になるので、最初の聖餐式は金曜日というのが正確かもしれません。それはともかく、十字架の前日にイエス様は弟子たちに何を残そうとされたのでしょうか。

5、節ごとに

◆ 過越の準備

14:12 （そして）除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日、（彼の）弟子たちがイエス（彼）に、「過越の食事をなさるのに、（わたしたちは）どこへ行って用意いたしましょうか」と言った。

除酵祭の第一日はニサンの月の 14 日、過越祭はニサンの月の 15 日なので、正確には違う日になります。しかし現代のように真夜中で日付が変わる暦では、同じ日の出来事だと考えることもできます。また 1 世紀には、除酵祭と過越祭は混同されていました。

過越の食事では、ユダヤの人々は出エジプトを記念して小羊を屠っていました。もともとは犠牲をささげるという意味合いが強かったのですが、その要素は後退し、神さまが救済して下さったという恵みを祝うようになったようです。

14:13 そこで、イエス（彼）は次のように言って、（彼の）二人の弟子を使いに出された（て言う）。「都（町）へ行きなさい。すると、水がめを運んで（持って）いる男（があなたたち）に出会う。その人について行きなさい。

11章1～11節には、イエス様がエルサレムに入る際に乗った子ろばを見つける物語がありました。それと同じく、イエス様は先見性を発揮します。町で水がめを持っている男を捜すのは、それほど難しいことではありませんでした。なぜなら当時、水がめを運ぶのは女性の仕事とされていましたが、男性が運ぶとしても革袋を使うのが普通だったからです。

この出来事について、イエス様が前もって準備していたと解釈することも可能でしょう。しかしマルコ福音書は、これらのことすべてが、神さまによって備えられたことを強調します。

14:14 （そして）その人が入って行く（場所で、その）家の主人にはこう言いなさい。『先生が、「（わたしの）弟子たちと一緒に過越の食事をするわたしの部屋はどこか」と言っています。』

過越の食事は通常、家族とおこないます。しかしイエス様は、弟子たちと一緒に食事をすると言われます。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」という言葉を思い起こします。

14:15 すると、（その人はあなたたちに）席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれるから、（そして）そこに（で）わたしたちのために準備をしておきなさい。」

過越祭の期間には、たくさんの方がエルサレムに巡礼に来ていました。その人たちのために、食事の部屋を準備することは、当時の風習だったようです。それにしてもイエス様の頼み方は、多少無礼なようにも思いますが。

「整って用意のできた」という言葉には「広げる」という意味があり、じゅうたんを部屋に敷くイメージです。また当時の食事は片ひじをついて寝そべった状態でおこなっていました。そのための寝椅子やクッションも用意されていたようです。

14:16 (そして) 弟子たちは出かけて都(町)に行つて(入つて)みると、イエス(彼)が(彼らに)言われたとおりだったので、過越の食事を準備した。

すべては、イエス様が言われた通りでした。イエス様が弟子たちと共にする食事、偶然おこなわれるわけではありません。すべてのことは、神さまが定められたように起こるのです。

同じように、イエス様の受難もイエス様にとって思いがけないことではありません。イエス様はその神さまのみ心を前もって知っており、エルサレムへと進まれたのです。

◆ 主の晩餐

14:17 (そして) 夕方になると、イエス(彼)は十二人と一緒にそこへ行かれた(来る)。

そして場面は、「二階の広間」に移ります。これからおこなわれる過越の食事の中で、イエス様は驚くべきことを伝えます。

14:18 (そして) 一同(彼ら)が席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。「はっきり言っておくが(アーメン、わたしはあなたたちに言う)、あなたがたのうちの一人、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ろうとしている(引き渡すだろう)。」

イエス様たちは食事をしていました。この場面はダヴィンチの描いた「最後の晩餐」で有名ですが、実際にはイエス様たちは円になって横たわっていたと思われます。



イエス様は、「アーメン～」と話し始めます。イエス様はとても大事なことを語られるときには、「アーメン」と言っていました。そして続けられた内容は、イエス様と一緒に食事をしている人がイエス様を引き渡そうとしているという、恐ろしい内容でした。

新共同訳聖書で「裏切る」と訳された言葉は、もともと「引き渡す」という意味で、人を逮捕して官憲に引き渡すときなどに用います。「屠り場に引かれる小羊のように」イエス様を敵対者に渡そうとしている人物が、親しく食事をしている人の中にいるのです。

14:19 弟子たち（彼ら）は心を痛めて、「まさかわたしのことでは（ないでしょう）」と代わる代わる（一人ずつ順に彼に）言い始めた。

「まさかわたしのことではないでしょう」という言い方は、否定の答えを期待する疑問文です。彼ら弟子たちは、「そうだ、あなたのことではない」というイエス様の言葉を期待していました。



なぜ彼らは、イエス様にそのように尋ねたのでしょうか。自分に何もやましいことがなかったら、胸を張って「いえ、わたしはそうではありません」と言えたと思います。

この言葉は、マルコ福音書の読者に対しても、勧告的な意味合いを持ちます。この言葉はユダにだけ向けられたものではありません。他の弟子たちにも、そしてわたしたちの心に向けても、語られているのです。わたしたちは「いえ、わたしはそうではありません」と言えるのでしょうか。それともイエス様を裏切り、死に引き渡そうとしてはいないのでしょうか。

14:20 イエス（彼）は（彼らに）言われた。「十二人のうちの一人で、わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ。」

この鉢には何が入っていたのでしょうか。ヨハネ福音書にはパンを浸す場面が出てくるのでマルコでもそうなのか。あるいは過越の食事には苦菜が出てくるので、それを浸すための果物のソースが入っていたのか。あるいは手指を洗う水が入っていたかもしれません。

いずれにせよ、その鉢を共有しているほど身近にいる人が、イエス様を引き渡すのです。マタイ福音書ではこの後、ユダとイエス様との会話がなされ、読者はユダが裏切り者だと確認します。しかしここにはユダの名前は出てきません。共に食卓を囲んでいても、いつイエス様を引き渡す者になってもおかしくない、それがわたしたちなのかもしれません。

14:21 （というも）人の子は、（彼について）聖書に書いてあるとおりに、去って行く。だが、人の子を裏切る（引き渡そうとする）その者は不幸だ（禍いあれ）。生まれなかった方が、その者のためによかった。」

「書いてあるとおりに」とは、旧約聖書の特定の場所を指すのではなく、神さまの計画と目的に沿っていることを示します。イエス様の身に起こることは、たんなる悲劇ではありません。すべては神さまのみ心でした。イエス様を引き渡す者が登場するのも、神さまの計画なのです。しかしその者は、禍いがあるようにと呪われてしまいます。

◆ 最初の聖餐式

14:22 (そして)一同(彼ら)が食事をしているとき、イエス(彼)はパンを取り、賛美の祈りを唱えて(祝福して)、それを裂き、弟子たち(彼ら)に与えて言われた。「取りなさい。これはわたしの体である。」

ここから、聞き覚えのある言葉が続きます。いわゆる「聖餐制定語」です。聖公会では聖餐式の感謝聖別の中で、これらの言葉を唱えます。このイエス様の言葉は、福音書が書かれた頃にはすでに礼拝で用いられていたと思われまます。

マタイ・マルコ・ルカ福音書とコリントの信徒への手紙一にはそれぞれ聖餐制定語が書かれていますが、マルコのものが一番シンプルです。そこに共同体などが「罪が赦され」、「あなたがたのための」、「わたしの記念として」といった教えを組み込んでいったのでしょう。

イエス様が弟子たちに体としてパンを渡した所作は、ご自分の受難に参与しなさいという招きとみることができます。またパンが裂かれるときには、いつもイエス様がいてくださるという約束だとも考えられます。

14:23 (そして)また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて(して)、彼らにお渡しになった(与えた)。彼らは皆その杯(そこ)から飲んだ。

本来パンを裂いたあとに食事が始まり、杯から飲むのは食事が終わる時です。また過越の食事などで、杯を共有する習慣はありません。つまりこれは普通の食事ではなく、特別なものであることがわかります。

ここで「ぶどう酒」と呼ばず、「杯」と書かれています。杯には象徴的な意味があり、契約や死と関連付けられます。この杯から、彼らは「皆」飲みます。この「皆」は強調されています。イエス様を引き渡そうという者も、この交わりに加わることを許されていたのです。

14:24 そして、イエス(彼)は(彼らに)言われた。「これは、多くの人(々)のために流されるわたしの血、契約の血である。」

イエス様は間もなく、十字架上で血を流します。その血は犠牲の小羊の血のように、神さまと人々の間を執り成す契約の血となります。

血は贖いのために自らを犠牲とされたイエス様の象徴です。イエス様の体と血をいただくことによって、わたしたちは新しい命に生かされるのです。

14:25 はっきり言うておく（アーメン、わたしはあなたたちに言う）。神の国で新たに（これを）飲むその日まで、（わたしは）ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」

ここでも「アーメン」から始まる大事な言葉をイエス様は語ります。それは「神の国で飲む時まで、ぶどうから作ったものを飲まない」ということです。裏を返せば、「わたしはいつの日か、神の国であなたたちと祝宴をあげよう」という約束とも聞こえます。

つまりイエス様はこの食事の後、十字架に向かいますが、その死がすべての終わりではないのです。地上で共に食事をするのではないかもしれない。しかし神の国で、イエス様と共に杯を交わす時が必ず来るのです。その代わりに、わたしたちも加わりたいものです。

14:26 （そして）＝同（彼ら）は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけた（出て行った）。

賛美の歌とは、「ハレル賛歌」と呼ばれる詩編 114～118 編だったと思われます。そして「恵み深い主に感謝せよ。慈しみはとこしえに」という言葉で囲まれた詩 118 編は、過越の食事の終わりや主の晩餐のときにも歌われていました。

最後の食事を終え、彼らが向かった先はオリーブ山でした。その近くのゲツセマネで、イエス様は逮捕されることとなります。「わたしを引き渡す者がいる」、「わたしの体を食べ、わたしの血を飲みなさい」。この言葉は、弟子たちの耳にどう響いていたのでしょうか。

<今日の箇所から>

今日は二つのことについて、思いを寄せたいと思います。一つは 19 節の言葉です。「まさかわたしのことでは」。弟子たちはすべてを捨ててイエス様に従い、歩んできました。誰よりもイエス様の近くにいたはずです。その彼らですら「まさか」と問う。それほどまでに、人間は弱いのです。信仰の確信が持てない、それがわたしたちの姿なのです。

そのわたしたちに、イエス様はパンと杯を与えてくださいます。自分の力で生きていくことができないわたしたちが、イエス様の体と血によって生きる者となるように定められたのが、聖餐式なのです。わたしたちは聖餐を受けながら、いつの日か神の国でイエス様と共に祝いの席に着く、そのことを待ち望むのです。

今回の学びはこれで終わります。次回は 9 月 20 日(木)10 時半からです。「ペトロの裏切り予告、ゲツセマネでの祈り」（マルコ 14：27～42）について学んでいきます。